

(対象事業：先進的な展示・教育普及手法の開発等の事業)

事業名：「萩学なんでもBOX」  
で 萩再発見！

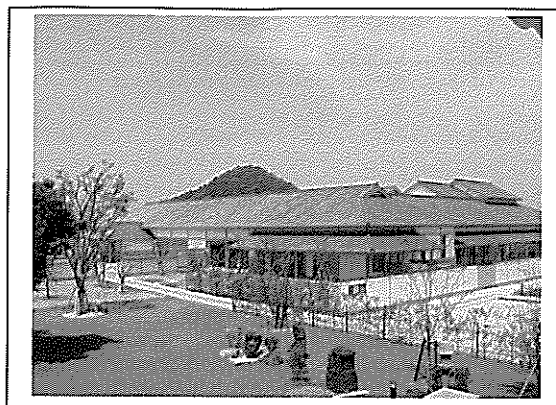
事業者名：萩博物館

住所：萩市堀内355

TEL：0838-25-6447

FAX：0838-25-3142

HPアドレス：



#### ①施設概要

平成16年（2004）11月11日 リニューアル開館の総合博物館。

#### ②事業の意図目的

- ・ 観覧するだけでなく、安心して触ることができる体験型展示資料「萩学なんでもBOX」を、市民参加を誘導しつつ企画・制作し、また利活用を進めることで、萩市民が主体的に萩市と萩地域の歴史文化を再発見することを促し、それを契機として地域の歴史文化の継承と更なる発展を図る。
- ・ 「萩学なんでもBOX」の企画・制作にかかるワークショップや出前・博物館講座等を通じ、博物館とアウトリーチ学習素材セット「萩学なんでもBOX」の利活用促進を図る。また、積極的アウトリーチ活動を展開するための素地をつくる。
- ・ 地域の歴史文化や芸術の発展に資する市民活動の推進を図る。

#### ③事業概要

- ・ 市民公募で寄せられた「萩の色」「萩の音」「萩の竹」「萩の今昔」のテーマに沿って、持ち運び可能な小型の箱の中に資料と情報を納め、体験型展示資料であり且つアウトリーチ普及活動の学習素材セットとなる「萩学なんでもBOX」を企画・制作した。
- ・ BOXの内容の一部については、ワークショップなどを通じて市民参加を導きつつ制作した。また、テーマにかかわる伝等技術の記録や、染色・竹民具・古写真等の資料調査・収集・整理についても市民と協働で行った。
- ・ BOXの開発制作の一方で、小学校や公民館等においてワークショップや講座を実施し、博物館と「萩学なんでもBOX」の一層の利活用促進を図った。また、テーマにかかわりのある小企画展示を、市民参加を導きつつ企画・開催した。

#### ④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 「萩学なんでもBOX」4種10箱2セット

#### ⑤ワークショップ・講座等参加者状況

参加者人数 延べ 338人

内 訳

ワークショップ	10回	201人
出前講座・博物館講座	5回	106人
自主開催	4回	31人

## (1) 事業の実施状況について

### ① 事業の内容

- ・ 持ち運び可能な小型の箱の中に、萩の歴史、文化、産業等にかかわりのあるテーマに沿って、触れることができる資料や情報を収めた「萩学なんでもBOX」を開発制作した。  
(「萩学なんでもBOX」は、通常は展示室内の棚に収納し、アウトリーチ普及活動の際に持ち出す。大きさは、50 cm W×35 cm D×26 cm H、資料を含む重さは5 kg程度。)
- ・ テーマについては、市民公募で寄せられていた「萩の色」「萩の音」「萩の竹」「萩の今昔」とした。
- ・ ボックスに収める資料について、ワークショップや講座等を通じて市民参加を導きつつ制作を試みた。制作した成果物の一部は、実際に資料として「萩学なんでもBOX」の中に収納した。
- ・ テーマに関わる伝統技術（竹細工）保持者の掘り起こしと技術の記録を行った。
- ・ 地域の伝統的染色や衣料、竹製民俗資料・柿渋塗布民俗資料・古写真等の資料調査・収集・整理についても、市民と協働で行った。
- ・ 「萩学なんでもBOX」の開発制作の一方で、小学校や公民館などでテーマにかかわりのあるワークショップや講座を実施し、博物館と「萩学なんでもBOX」の一層の利活用促進を図った。
- ・ テーマにかかわりのある萩の竹製民俗資料と渋塗り民俗資料について、市民参加を導きつつ小企画展示を開催した。

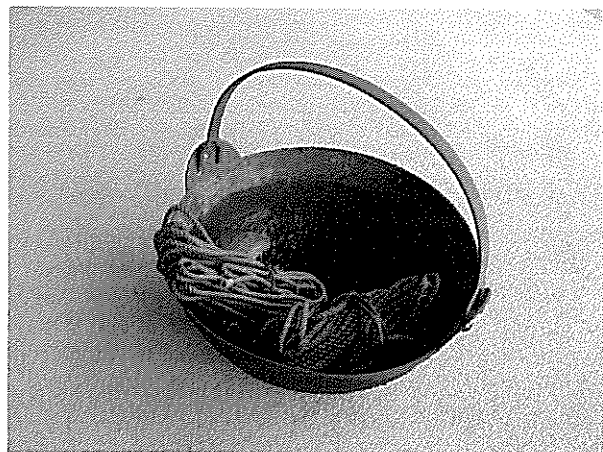
### ② 事業の効果

- ・ 地域の歴史文化や芸術等についての市民による再発見が進んだ。
- ・ 萩再発見のための自主的なワークショップなどが、博物館と博物館資料を利用して開催されるようになった。
- ・ 主体的に博物館活動にかかわりを持つ市民の利活用者が増加した。
- ・ 博物館活動をサポートすることを希望する市民の利活用者が増加した。
- ・ 事業の過程で、博物館と博物館利活用者との間で、双方向の交流が進んだ。
- ・ 「萩の色」ボックス制作においては、ワークショップ等を通じて伝統的な染めに関する関心が高まり、染色と博物館を介したネットワークが広がった。また、地域での柿渋製造復活とそれを用いた伝統的建造物や民具の補修が模索されることになった。
- ・ 「萩の色」ボックス制作においては、江戸時代から昭和初期の萩地域における藍製造と利用の歴史の掘り起こしが進み、資料所在が明らかになった。
- ・ 「萩の音」ボックス制作においては、地域で「カンカン石」と呼ばれていた石や鳴り砂の音の再発見から、博物館と小学校とが連携して地域の総合学習に取り組むこ

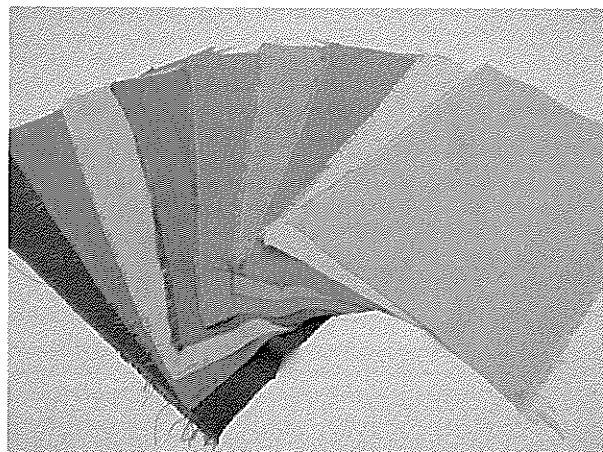
とになった。

- ・「萩の竹」ボックス制作においては、地域の伝統技術の記録を行う中でその特徴の一端を確認することができた。また、現在製作されなくなった民具の収集を行うこともできた。
- ・「萩の今昔」ボックス制作においては、まとまった数の古写真資料の掘り起こしが進み、更なる自主的な資料調査と博物館への情報提供が行われるようになった。また、古写真に関する情報収集がきっかけとなり、伝統的な町並みやくらしへの関心が一層高まり、それらを保全しつつ活用する機運が醸成された。

## (2) 成果について



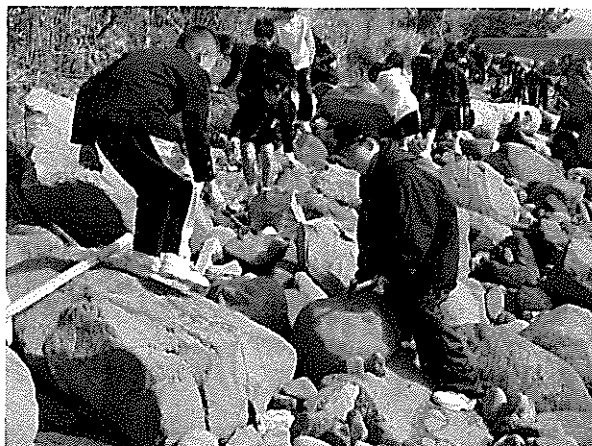
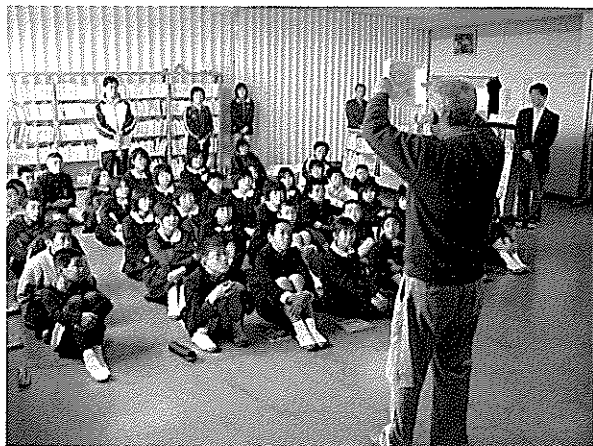
「萩の色」をさぐるワークショップを開催した。漁業集落のある地域では、かつて、ヤマモモや椎、タブなどの樹皮を煮出した液を鉄の釜に入れてロープや魚網を染めていたことから、伝統的な天然染料であるヤマモモを用いた染色を試みた。



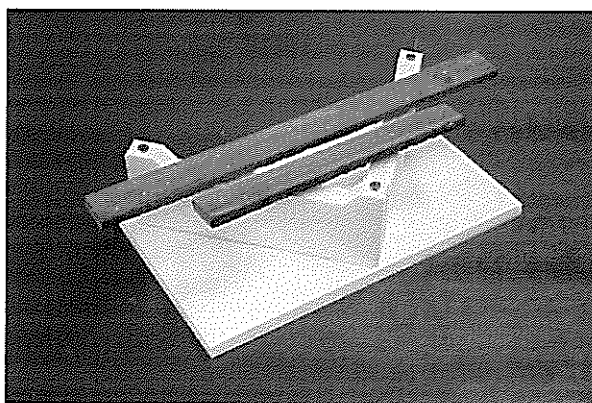
ワークショップを通じ、かつて萩地域で行われていた草木を用いた染色について再発見することができた。成果は、色見本帳にまとめて「萩学なんでもBOX」に収納した。

江戸時代に藩営「藍玉座」が存在し、また地域で染料となるタデアイが栽培されていた歴史を掘り起こすことができた。また、阿波徳島県と萩地域との藍取引きの資料所在についても、本事業を通じて

明らかにすることができた。



「萩の音」をさぐるワークショップでは、地域で昔から「カンカン石」と呼び親しまれていた、叩くと金属音のする岩石を探し出し、地域の石工職人の協力を得て、石琴に加工した。この岩石は、鏝などに用いられていた讃岐石と同質のもので、これをきっかけに地域を再発見しつつ「なんでも BOX」を制作する小学校・博物館連携授業がスタートした。



「萩の竹」については、継承が難しくなりつつある竹細工技術を記録し、製作過程を見ることができるよう工夫した。また多様な製品の見本をボックスに納めた。本事業が、地域の無形の文化についての再発見と、技術継承や新たな活動が生じる機会となるよう図った。併せて、市民参加を得て、地域の竹製民俗資料の調査・収集・整理を実施した。成果の一部については博物館において展示した。

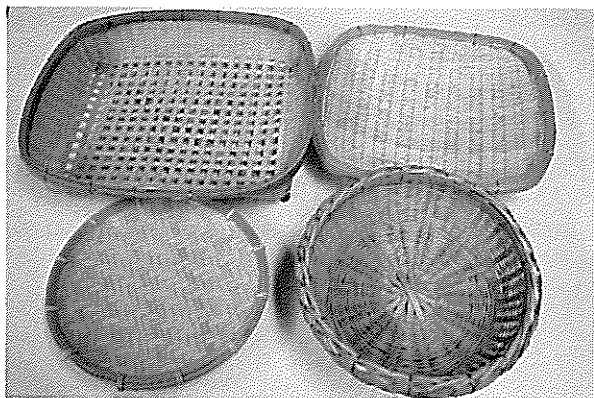


竹細工技術の記録

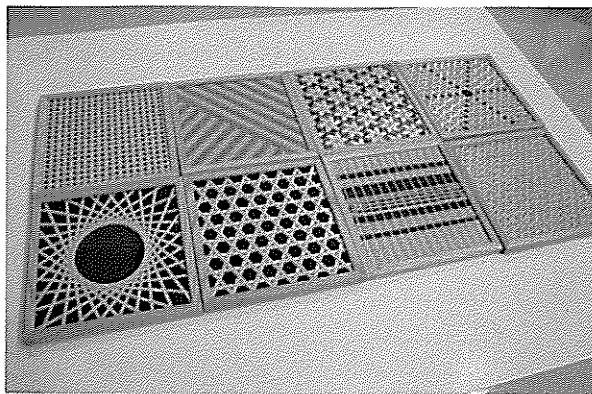


特徴のある縁巻き

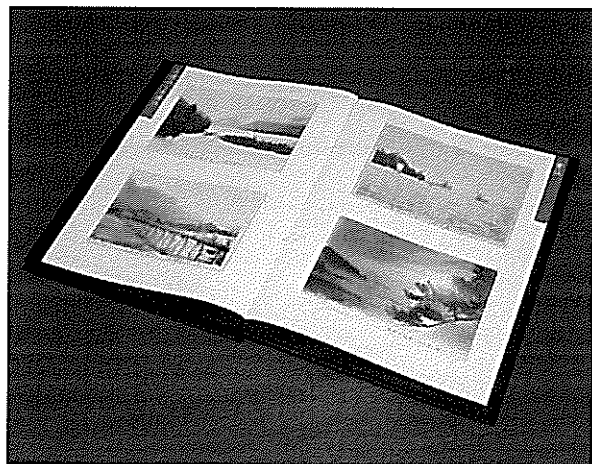
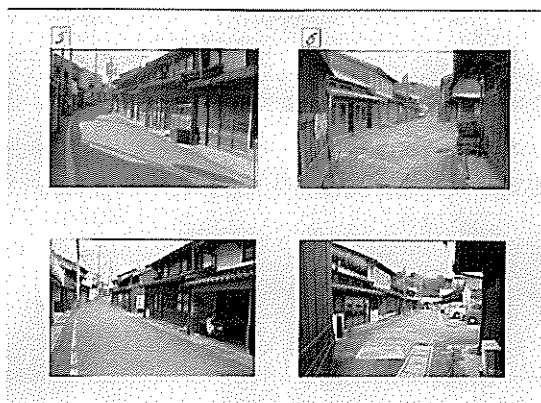
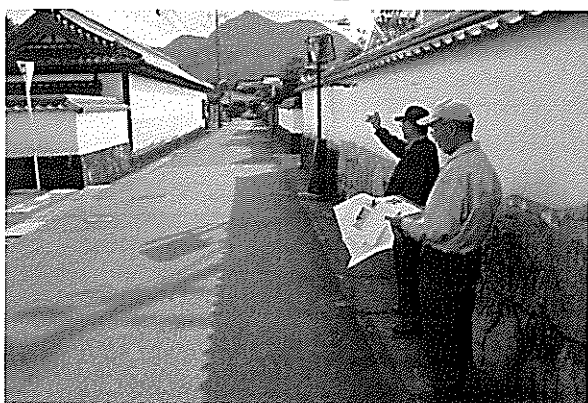




各種の編み方で編まれた竹製品見本



各種の編み方見本



本事業において、まとまった数の古写真と絵はがき資料の掘り起こしが進んだ。撮影日時や場所の特定と関連情報の収集を、市民参加を得ながら行った。成果は、古写真と現在の町並みを比較した写真帳や絵はがき帳に反映して BOX に収納した。

現在も、自主的な資料調査と博物館への情報提供が行われており、町並みの変化への関心も高まっている。

「萩の竹」製民俗資料や「萩の色」である柿渋利用資料の調査・収集・整理を、市民参加を得て行った。多くの資料と情報が寄せられ、その成果の一部を博物館において展示公開した。

柿渋の製造方法や利用についての情報が蓄積され、平成 18 年のシーズンには、市民と博物館協働で柿渋づくりに取り組み、収蔵資料等の補修、市内伝統的建造物への補修利用が検討されることになった。



柿渋塗り民俗資料の補修



柿渋塗り民俗資料の小企画展示



竹製民俗資料の小企画展示

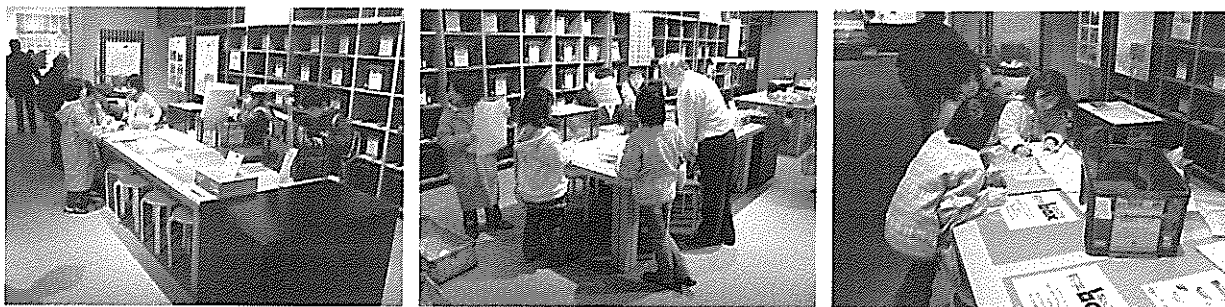
### (3) 参加者の感想



- ・ 地域の歴史文化再認識のために、小学校で「萩学なんでも BOX」の企画や制作に取り組んでみたいとの声が寄せられた。
- ・ 平成 18 年度には、市内の小学校 3 校で、17 年度のテーマの一つを掘り下げることと、地域の「萩学なんでも BOX」をつくることに取り組むことになった。



- ・ テーマが身近であり、主体的に博物館活動参加でき、また博物館資料に接することができることから、博物館に親近感を覚えるようになったという感想が多く聞かれた。
- ・ 自主的なワークショップの開催や資料調査・収集・整理が行われた。博物館活動に関わることは楽しいという感想が聞かれた。
- ・ 意外と地域の身近なことを知らないことに気づいたという感想が聞かれた。



- ・ 地域の歴史文化への関心が高まったという感想が聞かれた。
- ・ 博物館に対するイメージが変わったという感想が寄せられた。
- ・ 「萩学なんでも BOX」の内容充実や種類を増やして欲しいとの要望が寄せられた。

#### (5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

- ・ 身近なテーマへ市民と博物館が協働で取り組むことが、博物館活動への主体的な市民参加を促し、博物館を身近に感じる利活用者の増加や、利活用者層の拡大につながった。博物館利活用の促進を図るための糸口を見出すことができた。
- ・ 地域の特徴ある歴史文化の保全継承に関わる拠点施設として、地域文化への興味や関心の喚起、掘り起こしや継承の機運醸成に、少なからず寄与できた。
- ・ 地域の歴史文化にかかわる情報が、以前に増して集積されるようになった。
- ・ 出前講座等のアウトリーチ普及活動の展開が容易となり、今後、公民館や小中学校との連携事業を頻繁に行うための素地作りができた。
- ・ 来館者、利活用者、地域住人、博物館NPOスタッフ、博物館スタッフ等の間で交流が進み、双方向の情報のやり取りが進んだ。